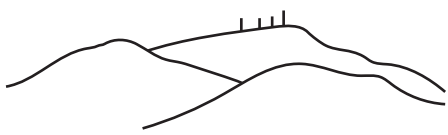


Youth Manna

2021/2/8 - 2/14



マルコ 1:35

さて、イエスは朝早く、まだ暗いうちに起きて寂しいところに出かけて行き、そこで祈っておられた。

2021/2/8(月)

民数記 16:23-50

コラとその仲間たちに対する神様のさばきが下りました。コラたちは生きてまま地に呑み込まれ、香をささげていた二百五十人は主からの火によって焼き尽くされてしまいました。また、さばきの翌日にモーセとアロンに不平を言った会衆は神様に罰せられ、大勢が死んでしまいました。

後にパウロはコリントの教会への手紙で、この出来事を指して「不平を言っははいけません」と書き送りました。「これらのことが起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。」(コリント 10:11)

コラの事件を他人事と思わず、自らも気をつけるものとなるよう！この教訓から何を学んだか、自分に問い直してみよう。

2021/2/9(火)

民数記 17 章

イスラエルの民は祭司アロンを、神様が立てた器として認めず不平を言っていました。そこで神様は、アロンの杖と他の族長の杖を区別され、ご自分が選ぶ人が誰であるかを皆の前で明らかにされました。これは彼らが不平を言うことで滅びてしまわないようにするためでした。

私たちはどんな時に不平を言ってしまうだろうか？不満に思っ心おだやかでない時に、私たちは神様の最善を信じれているだろうか。

心に感謝ではなく不平があるとき、立ち止まって神様に心を向けることができるように祈って今日を始めよう！神様が立てた権威(両親、先生、牧師先生、など)に尊敬と愛を表そう！！

2021/2/10(水)

民数記 18:1-20

主はアロンが祭司として立てられたしるしを見せて下さったが、民はアロンを祭司として全面的に信頼していないようであった(17章)。そんなアロンに主は直接語りかけられた。

まず、主はアロンに、聖所と祭司職に関わる奉仕の咎を負わなければならないと言われる(1)。それだけの責任がアロンと子どもたちに与えられているということである。また主は、アロンとその子どもたちが捧げものを受け取ることに命じられた(8-20)。それは彼らにとって永遠の割り当てであり、最も聖なるものである。祭司としての奉仕を支えるために、主は捧げものは「あなたのものである」とアロンに語られた。

神様が立てて下さっている牧師、リーダーのために祈ろう！

2021/2/11(木)

民数記 18:21-32

主はアロンとその子たちだけでなく、レビ族に対しても配慮された。(21-24) レビ族への奉仕の報酬を約束し、特権と責任を明らかにされ、相続地を持たない代わりに民が捧げる十分の一を与えられ、それによって生きるのである。

今の私たちも十分の一を捧げている。献金によって神様への最大の感謝をあらわし、それは牧師たちの生活を支えることや教会のさまざまな働きに用いられている。

お金というのは大切なものである。だからこそ神様への感謝を形としてあらわせる最大の物なのだろう。そして神様が十分の一を捧げるように言っている。喜んで実行していこう！

ボンカレーの日 2021/2/12(金)

民数記 19 章

▶「汚れ(けがれ)を除くための手順」の話だ。最初にきよめの水を作るための手順があり(2-9)、その後具体的な汚れの内容ときよめる方法が書いてある(11-22)。

▶汚れが除かれてきよめられることで、聖なる神様に近づくことができるようになった。同じように、私たちには罪があるから神様に近づくことが出来なかった。しかし、今はイエスキリストの血によってきよめられている！

▶次の箇所を思い巡らそう：もし私たちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。(1ヨハネ 1:9)

2021/2/13(土)

民数記 20 章

イスラエルの人々はツィンの荒野に入り、カデシュにとどまっていた。そんな旅の途中でモーセとアロンは姉であるミリアムを失うことになる。悲しみの中にも、人々は水がないことでまた神様に、モーセたちに文句を言い続けていたね。

その人々にモーセたちは怒り、神様がしなさいと言ったこととは別のやり方で、神様の奇跡を起こそうとしてしまい、その結果約束の地へ入ることができなくなってしまった。

そこから私たちは何を学ぶことができるかな？人生という信仰の旅をしていく中で神様に、そして神様のことばに信頼して歩めるよう祈ろう！

2021/2/14(日)

民数記 21:1-20

民は旅の最終盤まで神様とモーセに反抗的でしたが、長い旅の出来事を通して、神様への信頼を少しずつ学んできました。この時、民が悔い改め、燃える蛇を仰いだのは、それを象徴した出来事だったようにも思えるね。

私たちの信仰の旅も神様を仰ぎ見ながらの旅です。神様を仰ぐとき、私たちは自分の良くないところに押しつぶされず、計り知れない神様のご計画の中に生かされていることを心に刻むことができます。これは幸せなことですね。

祈り：イエス様を、父なる神様を仰いで生きることができるよう。